



# ららばい、通信

2022年  
春号

特集  
みて、きいて、知って、  
止めて虐待!!

画/大野隆司



## [目次]

- |                                |           |                           |           |
|--------------------------------|-----------|---------------------------|-----------|
| ■ COLUMN/シングルマザー               | 西館 好子 …1  | ■ 日本子守唄紀行<br>「中国地方の子守唄」   | 鶴野 祐介 …14 |
| ■ 特集 「みて、きいて、知って、止めて虐待!!」      | 川崎 二三彦 …2 | ■ 連載 直島便り<br>「女文楽と瀬戸内芸術祭」 | 山根 光恵 …16 |
| ● コロナ禍の虐待                      | 小林 登 …4   | ■ 子ども配食の現場から ④            | 樋田 敦子 …17 |
| ● 子守唄で優しい家庭を優しい社会を築こう          | 藤澤 昇 …5   | ■ 活動報告                    | …17       |
| ● 心の雪中踏破訓練                     | 樋田 敦子 …7  | ■ 寄付者名簿                   |           |
| ● ある虐待裁判傍聴記                    | 帯津 良一 …8  |                           |           |
| ■ 新連載 「消えた座右の書」                | 尾原 昭夫 …10 |                           |           |
| ■ 絵解き 風流子ども歳時記<br>春の絵暦・うたごよみの巻 |           |                           |           |

2022年4月発行



令和4年

ららばい通信 春号を

お手元にお届けさせていただきます。

春です。

何処を見ても春のにおいが、芽吹きが感じられます。なのに、なぜか心が晴れません。ひとえにロシアのウクライナ侵攻はまさかの戦火を現実として映し出しているの気になってしかたありません。しかし、なぜ、独裁者一人の力がそんなに強いのか、反戦の声が微塵も届かず拘束されるという国がある…：自国を追われ、雪の舞う中を他国に逃げ歩いていく母子の姿や流れる涙が写されると胸がつまります。

理不尽と分かっている、全面戦争になるので応援できない米国やNATO加盟国、すでに情報や武器戦力は大掛かりな戦争と何も変わっていないという事実。本当に打つ手はないのでしょうか。この冊子が皆様のお手元に届くころには何とか平和を取り戻してほしいと願わざるを得ません。

日本とて本当に幸せの国と安堵ばかりはしてられません。ロシア、中国、北朝鮮 独裁国家に囲まれた我が国が、他国にすべてを頼っていて良い訳は在りません。軍備をするのではなく、自前で賄える衣食住を確保しておく時代が来ているのだと痛感します。桜は日本の国花ですよね。違いますが、これは我が国の花です、などと言われかねない日が来るかも、と思うとぞつとします。そうでなくても、あの中国からは「五木の子守唄」はわが中国の子守唄だと主張したくらいです。歴史も伝統もグローバルで世界的でいいという訳ではありません。

文化を売り渡すようになったら私たちは人間としての誇りさえも失ってしまうでしょう。それだけは未来の子ども達に伝達し守っていかなければならないはず。うららかな春をうららかな気持ちでまどろんでみる日本の春を失いたくはありませんよ。



# シングルマザー

西館 好子

母子家庭、ひとり親家庭、様々な事情はあっても子どもとその子供を扶養する母親の生活環境についての総称。30年前までは役所では「欠損家庭」という住民の部類に入っていた。

今や、その数は120世帯、なおも増え続けている。どうしてそうなってしまったのか。「はい、私シングルマザーです」、肩書になる程の流行する時代になってしまった。おまけに貧困と育児にハッケージされているから、時に悲惨な悲劇的な母子のありようとして喧伝されることも多い。

物質的に精神的に追い詰められた女性たちは、金がない、暇がない、仕事がない、時間がない、足りない、息苦しい、母親たちは、子どもを持つと自分の自由を奪われたいこともできないと嘆きつつ育児をしている。シングルマザーになってさらに子育ての負担が全面に母親一人にしかかることで、貧困は生活全般の不安に拡大していつているようだ。

声を大にしてシングルを自負しているには、苦勞をして子育てに立ち向かっている、満たされたい気持ちの発散になっている、かもしれない。

今まで私たちは貧困の原因を社会の制度や組織のありように由来すると考えていた。現代はそうではない。大量生産、大量消費の豊かな経済の時代の中にある。ある程度の収入を得て、大多数の人はその収入を購買力を高めるに使用している。欲のはけ口を衣食住のどれもに行き渡らせ、生活水準が高い生活とは金が使え、浪費が可能なものという意識になつていく。

消費はブームだったのだから。しかし、その反面では日常は追われるように生活の苦勞と働きバチと化した労働との毎日。金は経済を支える大切なものに違いないが、金がなくて生きられない、不幸なのだという確信

思わぬ人の罹病の報告があり身近に迫ってきたコロナ。とうとう義兄までに感染が及んだ。

義兄はほとんど外出しないから感染源は分かっている。デイサービスから帰宅後熱が出て、この時期なので姉はすぐコロナを疑い救急車を呼んだ。救急車はすぐ来たが、受け入れてくれる病院は見つからない。やっと診察だけならというので、自宅から離れた病院にむかった。

検査の結果は「コロナ陽性」。そう分かったが今度は入院させてくれる病院は見つからない。結局七時間救急車の中で待機して、挙句病院は見つからず自宅に戻され、自宅療養ということになった。

それから十日間義兄と姉、付き添った姪が監察状態で過ごした。ワクチンを打っていたせい、義兄は軽く済んでほっとしたが、家族の皆はそれぞれに考えることが多くあった。姉も姪も介護と看護でたたくたになつたがコロナに罹ることはなかった。濃厚接触で済んでいたからいいものを。

これが一人住まいで、まして高齢者だったらどうなっていたのだろう。その前に高熱で倒れていたら誰が発見してくれたのだろう。看護は誰がするのだろう。まして義兄は介護という日常の中にある。当然、介護士はコロナ患者の所へはやってこない。

程貧しさに近い発想はない。何より人間に大切な「家庭」の崩壊と子育ての失敗を最も鮮明にしているのがシングルマザーの出現なのではと云っては、少し酷だろうか。

しかし、未来の人間らしい人間を望むなら、シングルマザーこそ、子どもの問題を直視し、子育てという大切な問題に取り組みべきだと思ふのだけれど。自立のためにお金と仕事が悩みの種という声は聞こえても、なかなか子どものあるべき姿という大切なものにとどり着かない。

とにかく仕事があれば、お金があればがが優先事項というのがどうにも気になる。そんな話をよく聞く。その昔の風景はそれはそれでいい。

母親が働きに出ているので非行や少年犯罪や暴力や心の荒廃が起こると決めつけられてはたまらない。親との関係が健康にあるなら、親が働きに行つたくらいで問題をおこすわけもない。子が生きる力を持つていけば、突然問題をおこすことはない。

新しい子育てのノウハウがいかに必要かを真剣に考える先駆者がシングルマザーであつてほしいのだ。

シングルマザーのほとんどは「子どもは可愛いし、いつも一緒にいたい存在」と思っている。男の子の母親は特にそう思い、可愛がつている。多くはここで大きな間違いを起している。多岐にわたる。子どもたちの荒廃は紛れもなく家庭から始まる。甘やかされ、思うが儘に育てられた幼児期を送ると、その子はまず親を、大人を信じることはない。母子の依存関係に酔い、一体感とペット化で自分の分身として過度のスキンシップの中で子育てがなされていく限り、子どもの自立の手助け等できやしない。今は国家や家の継続のために子を産むわ

保健所は入院先を探してくれるといつたが三日たつても病院は見つからない。既に保健所はお手上げで「買い物は近所なら仕方ない」「緊急ではタクシーを使つて下さい」としか答えられない。

コロナの正体が分からないのだから仕方ないが、何とか乗り切れたのは知人の医師の指示や助言のおかげ、義兄のかけつけの主治医の遠隔指示、それに姪や孫たちの日常の連携がうまく機能していたからだとも痛感した。

しかし、世の中これからすべてこんな事態になるのかもしれない。親しい親身になってくれる知人や、家族のありがた

## ええ、コロナ？

日本ららばい協会 理事長

西館 好子

動く人ほどあてにはならないとしみじみ思う。日頃の人の付き合い方は心があつてのことだから親身になれるのだ。多分、災害でも緊急事態でも「人の縁」と「人の情け」が物を言うのが世間というものだろう。

ちなみに天と地の間にいるから「人間」、その間にある世の中が「世間」。

世間とは人が集まり、そこで営まれる生活、交わり、和づくり、生きる全般の知恵と生業を云うものだ。私たち一人一人が自分たちの世間の中で泳いでいる生物という事なのだろうが、世間を決して馬鹿には出来ない。

ではない。子供が欲しい、家族の結びつきが欲しいという願望、自分の命が伝わり、親として成長したいという人間として自然な私的な思いで子を産み育てる女性が大半ではないだろうか。

そして、出来のいい子供、という完成品を育てるために、不安と緊張の中で夫不在母子密着のなで子育てが進められていく。見ている限り、日本の母親は子どもに過干渉。幼児期に子どものしたいようにさせた親はさらに反抗期になる子どもの成長期に、母親の指示や先回りの言動で子供から貴重な生活体験を奪っている。一番親しい他者としての距離感もなく、「しつけ」も、考える力も先回りして、子に関わり出す。母親の言葉は聞き流され、親は子の顔色を見ることを利用する。

過干渉過保護のつけは、依存心と自己中心のエゴを子どものころに刷り込んでしまつた。

父親はと言えば、今のイクメン、家事参加は、もう一人の母親の存在を作るだけなのではないだろうか。考えたら悲しい親たちの現実が見えてくる。

たぶん離婚の原因も夫になる人はそんな母子密着の中で育つた男かもしれない。自分を甘やかして、自分の思い通りにさせてくれた母親を望む幼児のままの心が潜在的にあつたとしたら、とてもパートナーとして付き合つて等居られない。父親には母親まで演じて欲しくない。シングルマザーよ、子どもを独立した「個」として認識できる母親になつて欲しい。失われた時間の代償として子どもへの執着が倍加させるシングルマザーを見るたび、どうせ夫を捨てたなら、我が子だけは自立心を持ち社会人となる地盤を用意するくらいの気迫がシングルマザーに欲しいものだと思ふ。

# みて、きいて、知って、止めて虐待!!

## コロナ禍の虐待

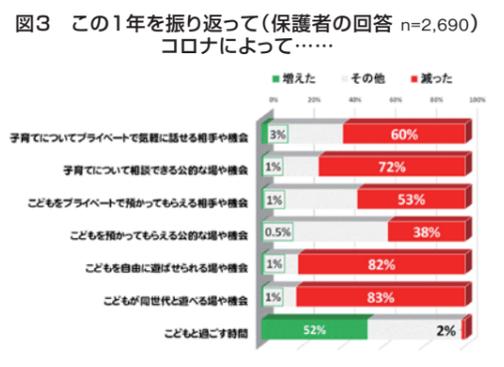
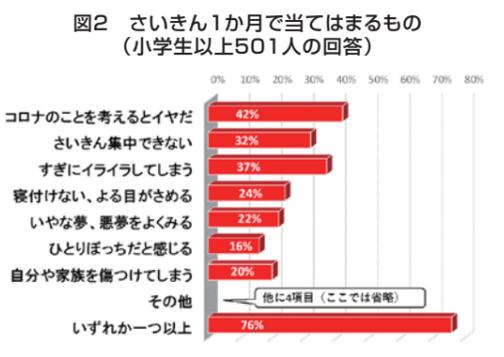
子どもの虹情報研修センター 川崎 一二三彦

### コロナ禍の子育て

2020年の初め、クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号で新型コロナウイルス感染症の患者が発生したとき、私はまだ対岸の火事のようにしか考えていなかった。ところがその後、繰り返し感染爆発によって人々の生活様式は一変し、あらゆる人が暮らしの隅々にまで多大な影響を受けている。

では子育てをしている人、子育てに支援を必要としている人は、コロナ禍でどのような生活を送り、どんな苦勞をしているのだろうか。

ここでは2つの調査結果を示しながら、子どもや家族の実情について考えてみたい。調査の一つは、特別支援学校に通う子どもたちの保護者へのアンケート調査だ。北海道教育大学釧路校特別支援教育研究室の先生方が、道内の特別支援学校に在籍する子どもの保護者を対象に、新型コロナウイルス感染症によって休校や生活制限を余儀なくされた障害児やその家族が、どんな状況に置かれ、どんなニーズがあるかを尋ねている。



調査は2020年9～10月に行われていたが、この年は、新型コロナウイルスが日本社会を席巻した最初の年であり、3月には学校が一斉休校となり、4月になると全国で緊急事態宣言が出されるなど、社会全体が混乱し、あたふたしていた時期だ。なお、回答した保護者は、重度の障害を持つ子どもたちを育てている人が多く、さまざまな困難に直面していることがわかった。

図1に家族の悩み、困りごととして挙げられた上位10項目を示してみたが、さまざまな困難が如実に表れているように感じられる。保護者の声をいくつかを紹介してみよう。

- 頭がぼーっとして考えがまとまらない。不眠に悩んでいるので精神科から眠剤と精神安定剤をもらって服用し、何とか今をしのいでいる。
- 障害があるから面倒を見てもらえず自宅で監禁状態。なので親も失業した。
- しばらくの間はテイクサービスも使えなくなったので、テイクサービスがなくなってしまう不安もありました。

### コロナ禍の子どもたち

こうした保護者の悩みだけでなく、いつもの日常を奪われて困惑している子どもたちの様子も報告されている。

- 休校の意味が分からないので毎朝登校時間にパニックを起こしていた。

- 本人がマスクをつけることが難しい上に、最初は人がしているのも取ろうとしたり、貴重なマスクを破かれたりして困った。
- 子どもが持病でよく発熱するが、コロナのせいが見分けるのが怖かった。

等々である。さて、困難は障害児やその家族に限ったことではない。もう一つの調査を眺めると、コロナ禍の子どもたちの生活を垣間見ることができる。国立成育医療研究センター「コロナ×こども本部が実施した第5回調査報告書がそれだ。本調査は、2021年2～3月に行われたものだが、保護者だけでなく子ども自身も直接アンケートに答えている点特徴だろう。それを図2で見ると、「コロナのことを考えるのがイヤだ」「集中できない」「イライラする」などを含め、コロナ禍で何らかのストレスを感じている子どもが4分の3を超えていた。

- 具体的な声を紹介してみよう。
- 学校でやっちゃだめが増えたのは嫌だ。沢山遊びたい。早く前みたいになりたいです(小学5年生女児)。
- バスケのがつしゅくにいけなかったのが悲しい(小学3年生男児)。
- もう死にたい、心の限界が近づいている(中学1年生男児)。

受験生だったが志望校を諦めた。看護師になったかったけど「コロナ怖い自分自身も体力なくなっているので看護は無理だと思った。正直諦めたくなかったし毎日辛くて泣いてます(高校3年生女児)。こうした声はコロナ禍の生活状況から必然的に生み出されていると言っても過言ではあるま

れたら良いのに、と思う(高校1年生男児)。密閉、密集、密接という、いわゆる三密を避けなければならぬ状況の中で、急遽オンライン授業などが試みられており、そうした取り組みを歓迎する声であろう。

ところで、改めて図3を見ると、唯一増えているのが「子どもと過ごす時間」であった。当事者である子どもの回答にも、次のようなものがあった。

- 私は、家族と話す機会がふえてよかったです(小学3年生女児)。
- ただし、こうした回答に混じって、ある保護者は、知り合いのご家庭の様子を気にして次のように述べていた。

私の友人夫婦の家では、旦那さんがリモートワークになったことによる、子ども(5歳児)に対する虐待が始まりました。このようなき、身近な人間がどのように動けばいいものか、相談窓口を知りたいと感じました(小学4年生女児)。「やはり……」

というのが私の感想だ。保護者と子どもが家庭で過ごす時間が増えたといっても、手放しでは喜べない。子どもは子どもでストレスを抱えたまま、自由に遊ぶこともできず家庭という狭い空間にとどまることを強いられ、大人の側も、なかには失業してやむなく自宅にいる人もいるだろうし、テレワークといっても、子どもがいれば落ち着いて仕事もできず、「静かにしろ!」などと、ついつい怒鳴りたくなることも生じる。そう考えると、家庭内のストレスが限界を超え、虐待のリスクが高まることも不思議ではない。

子ども虐待は、「児童の人権を著しく侵害」す

い。というのは、子どもたちの成長にとって是非とも必要な機会が、新型コロナウイルスの感染拡大によって失われているからだ。図3を見てほしい。こちらは同じ調査における保護者の回答だが、8割以上の人が「子どもを自由に遊ばせられる場や機会」「子どもが同世代と遊べる場や機会」が減少したと回答している。子どもたちは、本来の自由な空間を失い、ストレスを抱えた生活に直面していると言えよう。

### コロナ禍の虐待

新型コロナウイルスは、保護者自身においても、「気軽に話せる相手や機会」「相談できる公的な場や機会」「プライベートで子どもを預かってもらえる相手や機会」などを軒並み減少させて

るもの(児童虐待の防止等に関する法律)だが、だからといって、加害者である保護者を非難すれば足りるというものではない。虐待してしまう保護者も、個人の努力だけでは解決できない大きなストレスをかかえ、支援を待っているのである。そんな子ども虐待の今を、これからしばらく連載の形で報告し、皆さんと一緒に考えていければと考えている。

**告知** 次号から川崎先生の連載が始まります。

## 子守唄で優しい家庭を 優しい社会を築こう — 優しさを科学する —

東京大学名誉教授 小林 登  
元日本子守唄協会会長 (故人)

私が、大学を出て、アメリカでインターンをはじめた間もない1954年の秋のある夜、白人の女性が10ヶ月足らずの赤ちゃんを抱いて救急室に現れ、ベッドから落ちたと訴えました。赤ちゃんの全身のレントゲンを撮ったところ、ベッドから落ち、打ったという肩の骨が折れているのがわかりました。が、それ以外に大腿骨も折れていて、しかも既に治りかかっていました。

それは新しい骨折と古い骨折が共存する説明のつかない状態で、親による「子ども虐待」だった

ることができるという事です。

赤ちゃんを育てるときは言葉が解らないうちはスキンシップを豊かにし、言葉が解るようになったら感性と同時に言葉や音楽を意識的に使う様育てたいと思います。

### 優しさの影響

「優しさ」が人間にとってどのような影響を与えているか?ということを証明したものに、イギリスのウイドソンという学者の実験結果があります。

第二次世界大戦後ドイツの郊外にAとBという2つの孤児院があり、A孤児院の子どもの体重増加が、B孤児院よりも良かった。当時は戦争直後であり物資もなく、どこも同じ量の食事の筈なのに、なぜか差が出てしまっていたのです。調べてみますと、Aの方は若くて優しい保育さんが世話をしていて、Bの方はどちらかというと口うるさいおばあちゃんが世話をして、子ども達は、毎日が楽しくなく、上目遣いに見ながら食事もしていたのです。

そのおばあちゃんにもお気に入りの子どもがいて、その子どもたちは他の子どもよりも、体重が増加していたそうです。

そこで、A孤児院の優しい保母さんが辞めたとき、そのがみがみおばあちゃんにお気に入りの子どもを連れてA孤児院に移ってもらいました。結果、A孤児院の子どもたちの体重増加は落ち込み、おばあちゃんのお気に入りの子どもたちは絶対的な食分量が増え、体重も増加したのです。これは子どもの成長と発達に食事という栄養

ということが、あとでわかりました。戦勝国のアメリカは戦後も豊かで秩序正しく、キリスト教の国で、宗教的にもしつかりしている筈なのに、何故母親がわが子を虐待するのかが疑問に思い、深刻に受け止めたものです。その後何年か経ち、戦後の混乱から立ち直り、豊かになってきた1990年代後半から70年代はじめに、日本でも小児科医療の現場に「子ども虐待」の症例が始めました。

私の個人的な見解では、何か「豊かさ」というものが虐待と因果関係があるのではないかとこの思いがあります。社会がどんどん豊かで便利になって、人のことを考えなくても生活ができるようになり、物質万能主義、拝金主義になり、人と人との関係が希薄になってしまったからではないか、と思うのです。

人进行いやる気持ちや、人の気持ちを読み取る能力が無くなり、相談するべき人もおらず、子どもの気持ちさえも分からなくなり、親が子どもを虐待してしまうという事例がとて多くなってきた、それだけに限定は出来ないものの虐待が減るという事はないのです。

そこで、失ってしまった地域の絆、親子の絆をどうしたら取り戻すことができるかと考え、その一つの方法として、子守唄が有るのではないかとと思いあたり、私が日本子守唄協会の仕事をするきっかけとなりました。

子守唄の中にある力とは何かと考えたときに、私は子守唄の歌詞よりもメロディとかピッチだとか、音楽的な要素の中にある「優しさ」の力なのではないかと思えます。例えば「五木の子守

はもろろんのことですが、「優しさ」という「感性の情報」もまた、いかに重要な要素となっているかが分かる有名な論文、研究結果だと思えます。きつとがみがみおばあちゃんは気に入った子どもたちには惜しみなく優しさを発揮していたのでしよう。

またお産の時にお母さんになる人を励ましたり悩みを聞いてあげるエモーションサポートをつけることで分娩時間が短くなったり、痛み止めを投与する率、産褥熱発症率も共に低くなり、母体のみならず、新生児の異常入院率や新生児感染症発症も共に低かったという例もあります。産褥熱や新生児完成発症率などは非常に免疫に関係しているのですが、こういう部分に特に顕著な差が見られこの例からも「優しさ」が免疫力に大きな影響をあたえていることがわかります。生命のバトンタッチというもつとも重要な時期に「優しさ」の仕組みが働くという事は、なにかを示していて、重要なことだと思えます。

虐待などはさらに、心理的、情緒的なものが取り去られてしまった状態なのですから、発育も悪くなり、心身的な特徴や表情に表れてくるのは当然です。事例としても脳や心が破壊されていってしまうことが挙げられています。

### 子守唄の優しさ

「子守唄」は何か子どもの心をとらえる、あるいは大人の心をとらえる力を持った歌だと私もなんだか実感してよくわかりました。

「優しさ」に直結した唄なのです。「寝させ唄」は当然子どもを泣きやませおとなしく眠らせま

唄」などの歌詞においては、直接子どもに対する愛情のようなものが歌われている訳ではないのですが、それとは別にメロディやリズムなどの音楽的要素の中に「優しさ」を十分に持っているからこそ、子守唄は赤ちゃんの心をつかめるのではないでしようか。

### 「優しさ」というキーワード

- ★ 思いやりがあつて親切
- ★ 相手を気遣つて控えめ
- ★ おとなしく素直
- ★ 細やかで、やわらかい感じを与える様子
- ★ 優美である
- ★ 身がやせるように感じる

などがありますが、これらは子育てをしている母親が一番持っていたいものなのです。子育てに夢中になっている、無償の心で子供に語りかけるときには、独特のピッチやリズムが、素晴らしい優しいホルモンを発散するのも立証されています。

独自のピッチやリズムは、マザーリース 母親語、育児語ともよばれています。

これは人間のコミュニケーション全体に言えることです。

優しい人に話しかけたり、わが子や恋人に接したときは音楽的要素は非常に重要な役割を果たしているのです。音楽的要素に加え、情報伝達の意味でもあります。

私たちが人に何かを伝えるときは言葉は理性的な情報を、音楽の方は感性の情報を同時に伝え

す。「目覚め唄」「遊ばせ唄」は子どもが喜び元気になる効用があります。

そしてそれ以外に、うたっている母親の心が和む、勇気づけられる、落ち着く効果があるので、豊かな心をつくるプログラムが温存されているのです。私たちは褒めて優しく勇気づけ抱きしめ唄って子どもを育ててゆくことが、今、最も重要なのではないかと思っています。

「子守唄が流れる優しい町をつくらう」となればどんなにいいでしょう。

人類は優しさと凶暴な面を持ち合わせて現在に來ましたが、優しさが無い人間と人間の結びつきは、きつと虐待や暴力を増長されることになるでしょう。

日常生活からの「優しさ」を中心とした良い情報で、良い家庭、良い社会、ひいては良い国を作ってゆくことを意識していくのが人間の基本的な睿智といえるのではないでしようか。

(2017年秋号、ららばい通信に掲載)

## 心の雪中踏破訓練

社会福祉法人岩手愛児会会長 藤澤 昇

施設での愛着形成はその子どもにとって、生涯を通し強く生きる財産になる。私は社会的養護に身を置き、施設勤務50年の経験から、今もそ

れを確信している。  
今養護における子どもたちは厳しい現実さらされている。痛ましい報道が毎日繰り返され、子どもたちの悲劇はやむことがなく、収まりがつかない。

自分が釈然としない気持ちでいる時、地元の岩手日報に遠野市在住の53歳の女性の投稿が載った。「コロナ禍にあつて、人々の我慢を願う」という内容であった。

私が目を止めたのは投稿した主が、かつて私がいた施設の退園者であり、社会に向けて自分の意見をしっかりと提言、表現したことへの驚きでもあった。

翌日私は彼女に「社会に根を下ろし暮らしていることに密かに安堵した、いい文章であった」とメールを送った。

彼女は私が勤務していた虚弱児施設に心身症児として入所してきた。当時施設は喘息児や肥満児等の小児慢性疾患児が主で彼女の心の病は時代の先駆けでもあった。中学3年生のとき、施設生活の最後の仕上げとして、未知の行事に誘ってみた。宮古から盛岡間110キロを、雪中踏破するというもので、北上山脈越えに挑戦する苛酷なものだ。いまから38年前の話である。

子どもたちは、喘息や心身症等の病の克服のために、親元を離れ施設に入っている。正月や盆には一時帰省があるので、それを励み暮らしていたのだが、それを返上しての挑戦だった。もう一步という自立の道に五人の子どもたちが候補に上がった。  
私が彼女を踏破訓練に誘ったのは、自身の心の

弱さを克服するのにいい機会であると思っただらだ。打診すると彼女は素直に応じた。計画プログラムに、竹の節がより強調された心象的な若竹の絵も描いた。中学3年、多くは高校受験に最後の追い込みで勉強に専念している時期、彼女は自分を見直すほうを迷いなく選択したのだ。

厳冬の国道106号線を、私たちは盛岡を指し2泊3日、5人でひたすら無言で歩いた。引率も大変なら、子どもたちも必死である。まして、体や心に病を持つ一団の歩みは壮絶で、力を合わせ、心を一つにして励まし合いながら進んだ。そこには和みもあった。

最終日、在園生全員を迎えられ、歓喜の中にあつたの思いで帰園できた。踏破者みんなが涙し抱き合った。自分と向き合い、仲間と心を一つにして、やり遂げたという自信は彼らの人生の指針ともなったようだ。

その後、彼等彼女等の人生には人並みの紆余曲折があつたに違いないが――。

「先生に、学園にいた頃、帰省しないで、下手クソな若竹の絵を描いて山に登ったお陰で、少しは自分の意見が言える大人になりました」との返事、彼女に言われると、私の心に灯がともる。  
平成10年4月に、みちのくみどり学園が児童養護施設に移行してからも、この行事は続いた。ある時この実践報告を全国の職員研修大会で話したところ、他県の施設関係者から「それは職員の自己満足で、しかも施設内虐待ではないのか」と真面目に反論された。理由は子どもたちがあんな過酷な行事に「同意」するはずがない」というのだ。その言葉に、私はむきになって反論した。

実践した者しか分からない子どもたちとの苦業を共にした日々への「感動」があつたからだ。養育は感動の連続、それが真の養育。教育もまた然りのはずだ。

行われた過酷な訓練は、子どもも大人も「平等」で「対等」な関係で、心が一つになる。寒さに痛む足を引き摺りながら、共に声を掛け合い、ひたすら前に進んだ体験。そこから生まれる真の「信頼」関係の積み重ねこそが、私達が忘れていく子どもへの目線ではないだろうか。

20年続いたこの行事も何時しか消滅することになった。それは、児童養護施設になり虐待児の入所の驚くほどの急増に理由があつた。

今や受難と受苦の過酷な状況に置かれている子どもに「同意」など取れるはずがない。職員たちは、いつか子どもたちとまた「雪中踏破訓練」を行いたいと思っているが、果たして実現できるだろうか。虐待児や不登校児が増え続け、論や専門上の学問の中に解決を見出そうとしても、それはむなししいと思う。寄り添い、共に一緒に生きる体験の中から、人と人との感動や信頼が生まれ、社会にスムーズに入ることが出来る子どもが育つのだと思う。  
53歳になった卒園生の彼女の投稿は、未だ子どもたちと心の雪中踏破訓練を続け伴走する私の背中を押した。



ある虐待裁判傍聴記

「子どもは宝物だった。それは今も変わらない」

「のんちゃん、ごめんね。ただただ後悔しかない。こんな弱い自分がつらい――」

3歳の長女を置き去りにし、衰弱死させたとして保護責任者遺棄致死罪に問われた母親(26歳)の裁判員裁判を東京地方裁判所の813号法廷で傍聴してきた。平出喜一裁判長は「悪質かつ身勝手な犯行で、かけがえのない命が奪われた」と懲役8年を言い渡した。

新型コロナウイルスの第1波が襲った2020年6月、母親は交際の男性と9日間の鹿児島旅行に出かけ、戻ってみると長女は亡くなっていた。家を出るとき「のんちゃんが好きなお茶とかジュースとかを7本以上とお菓子」を置いていったという。寝ていた6畳の寝室の電気を消し、カギを閉めてテープで固定、さらにソファアを置いて「台所の包丁を取りに行く」と危ないから出ないようにした。のんちゃんのオムツを2枚重ねにして家を後にした。

それより以前、5月に外泊した際も、同じようにして出かけたというが、そのとき長女は置いていったものを食べ飲みして、無事だった。ところが6月は、帰ってみると、いつも寝ていたマットレスの上で長女は息絶えていた。発見されたとき、ペットボトルが1本、

お菓子も1袋残されていた。母親は必至で心臓マッサージをしたものの脱水と飢餓で死亡。ネグレクトの末の出来事。母親は慌てて自殺を試みたが、助けられている。

法廷に現れた母親は、腰まで届くような口グヘアで、茶髪が後退して、拘留期間が長いことを思わせた。黒のパンツスーツは、就職活動に行くような雰囲気年齢よりも幼く見えた。

いくつかの虐待裁判を見てきたが、いつも被告は「幼い」という印象だった。何が幼く見せるのか。それまでの経験なのか。経験のなさかそうさせるのか。言葉遣いの幼さ、語彙の乏しさがそういった印象を与えるのか。「いっぱい食べてほしいので、いっぱい置いていった」「はつきり憶えていない」と彼女は小声だが、頑張つて語った。

この裁判が注目を浴びたのは、母親自身が壮絶な虐待体験者であることだった。実母は高校生ときに妊娠し、母親を出産。児童養護施設に彼女を預けた。小学校に入學するタイミングで実母と再婚した夫が引き取ったが、そこで虐待に遭った。「お前なんか生まなければよかった」とバットでたたかれ、ごみ袋に入れて風呂場に放置される。包丁で切りつけられるといった行為が繰り返され、通報されて、母親は2週間の大けがを負い、実母とその夫は保護責任者遺棄などの容疑で逮捕された。そう地元の新聞が報じている。その後、母親は、施設で暮らし、高校

卒業を機に上京した。  
空港のレストラン、携帯ショップ、飲み屋、キャバクラ、居酒屋で働いた。のんちゃんを出産後、入籍したが夫婦仲が悪化。シングルマザーになった。元夫の母親は、孫のためにお金を用立て、オムツなどを送って協力したものの、社会的な支援にはつながっていなかった。彼女の収入ならば公営住宅に住み、児童手当も児童扶養手当ももらえはるはずだが、申請していない。いったん保育園に入ったものの、保育料が払えなくなつて退園した。収入に依りて保育料は軽減されるのに。長女の3歳児検診は未受診で、コロナの蔓延で保健師の訪問が延期し、助けられるはずの命も救えなかった。

母親と28回面会した社会福祉士は証言に立ち、次のように話した。  
「未成年のうちの大半を施設で育ち、愛されて育つ経験が出来ず、実母から虐待を受けたことで深い傷を負った」

「解離的自己状態」「断れない心理」と診断。「(男性にも)のんちゃんのことを話そうと思つたけれど、言えなかった。相手に否定的なことを言えないんです」(母親)

虐待の連鎖はよく言われるが、あまり研究はすすんでいない。虐待の成育歴があつても、楽しい子育てをしている人はたくさんいる。被虐待児にこそ、十分な心理的ケアが必要だと思わされた裁判だった。  
(樋田敦子)

新連載

帯津良一

# 消えた座右の書



私の酒好きは父親ゆずりです。前回紹介しましたように、家族全員が丸い卓袱台を囲んで、マッシュポテト一皿ずつの晚餐もじつに楽しいものでしたが、そのなかで何も言わずに目を細めながら手酌で盃を傾ける父親の姿がいちばん好きでした。

その私が酒を始めて口にしたのは、中学三年生の高校受験の頃でした。

当時から朝型の私は、夕食が済むとすぐに床に就いてしまい、翌朝4時頃に起きて、弟が熟睡している傍らで受験勉強に励んだものでした。何のわだかまりもなく、淡々と時を刻んでいるところに、ある日、ハイカラな小母さんが、私の夕食にコップ一杯の赤玉ポートワインをつけてくれたのです。中学生の分際での晩酌ですが、誰も何も言いません。

私も初めはこわごわと口にしてみました。決して不味くはないので、黙っていたけどことにしたのです。よく眠って朝しっかりと勉強ができるようにという小母さんの温かい配慮からなのでしょうが、さすがにハイカラな小母さんだなぁ

とつくづく思ったものです。

大学に入って、教育学部の二年間はクラスのコンパなどでは多少飲みましたが、好んで飲むということはありませんでした。ところが医学部に進んでからは、本腰を入れて勉強しようと思っただけで大学の近くに下宿したこともあって、急に飲む機会が増えました。

下宿といっても、この頃はもう賄い付きということはありませんでしたので、夕食は近くの食堂です。まだ晩酌の習慣はありませんので、簡単に済ませて下宿へ帰ります。そして、やたら医学書を繙くのです。医学は真正銘生まれてはじめてですので、見るもの聞くもの興味津々です。

だから、最初は勇んで読みはじめるのですが、小一時間もすると、なんとなくさびしくなってくるのです。なぜ、さびしくなるのか。後年になって思いあたったことですが、これは山口誓子の「学問のさびしさ」に堪へ炭をつぐのさびしさだったのです。ほのぼのとした郷愁にかられます。

おもむろに本を閉じて立ち上がり、財布をポケットに入れて夜の街へ。正門前の森川町に下宿



「ところで、私、じつは少しお酒を飲んでいます。それでもいいですか」  
「もちろんです。是非お願いします」  
「なんとものどかな雰囲気ではありませんか。いまではとても考えられませんね。」  
一年間の出張を終えて医局に戻ると、新しい飲み仲間が待っていました。二年先輩のT先生と一年先輩のU先生の二人です。二人ともミッテと称する中間職にあつて、一日のうちのほとんどは地下にある研究室暮らします。私も当然、新しく仲間入りです。夕方、研究室から上がって来ると、このお二人の先輩とよく医局であれこれお話をするようになりました。

酒飲みは酒飲みを知るとでも言うのでしょうか。あつという間に打ち解けて、三人でいっしょに夜の街に出かけるようになりました。行先は池袋駅の北口に近いKという居酒屋さんです。一階が5〜6人のカウンター席。二階は板の間で4人掛けのテーブルが三つ、三階は十数人の宴会の量の間です。

私たちはいつも一階のカウンター席。飲むのはもっぱら焼酎。若い店主さんを中心に男女4人の店主さんたちが、たすき掛けの和服できびきびと動く、じつに気持ちのいい店でした。このお店との付き合いも四十年ぐらいの永きにわたったはずですが、それはまたの話として、店主さんの話では、カウンターのなかから私たちの会話を聴いていても、しばらくは私たちの職業がわからなくて困ったのちに苦笑しながら話してくれたものです。映画の話などが盛沢山で医者らしい話などまっったくなかったそうです。

また、女性といっしょに盃を酌み交わすようになったのもこの頃です。ほとんどが大病院の看護婦さんたちです。仕事の面で苦楽を共にしていると、時にはいっしょに飲みたくなるのも人情のうちなのでしょう。女性軍は大抵は複数で、特別な男女関係に進展したことなどありませんでした。これはもう少し後の都立駒込病院時代の話ですが、こんなことがありました。

数人の男女で楽しく飲んだあと帰路につく。私に乗った池袋方面行きの電車にはもう一人の女性が。電車が動き出すや否や彼女が語りかけてきた。

「先生、今夜、私の家に泊まって行きませんか？」  
「えっ？」  
と相手の眼を見つめた途端に酒が背中を押してくれる。

二人揃って彼女の家へ。小さな家に一人暮らしの彼女。居間で丸い卓袱台を囲んでお銚子を一本空けたところで、彼女がふっと席を立つ。どうやら表に出て頭を冷やしていたらしい。帰って来たと思ったら三つ指をつけて、

「先生。私がいけませんでした。申し訳ありませんが、今夜は黙ってお引き取り下さい」

していた前半の二年間は、主として、真砂町のバー「それいゆ」か、正門前の郵便局の前に出る屋台のおでん屋さん。後半とインターンを合わせた三年間は西片町に下宿したので、西片町バー「フーラ」か、屋台のおでん屋さんでした。

おでんさんは中年の脱サラご夫婦。それだけにどこか素人臭い品のいいご夫婦でした。飲物は生の焼酎。学生の分際で日本酒は贅沢という気風が学生の間にあつたようです。

一方、バーのママさんはいずれも三十代半ばのきれいで頭のよさそうな人でした。「それいゆ」とのお付き合いは二年間ぐらいのものでしたが、「フーラ」とはママさんが急性腹症で亡くなるまで延々四十年にも及びました。わが人生の宝物の一つといつてもよいでしょう。飲物は一杯が五十円のトリスのハイボール。決してこれ以外のものには手を出さなかったのはやはり学生の分際での意識があつたようです。

外科医になって二年目に出張した静岡県立蒲原総合病院では当直の夜はかならず当直の婦長さんが自室で日本酒の熱燗を一本振舞ってくれました。そんなときに急性虫垂炎の患者さんがやって来ます。診察のあと、

「急性虫垂炎ですね。すぐに手術をしましょう」と言うと、同行のご家族の方が  
「ええ、お願いします」  
とすぐに応じます。そのあとがいいのです。

これにて一件落着。ほろにがい思い出です。

酒についてはまだまだ沢山の思い出があります。酒はわが人生を彩る大輪の花です。だから本屋さんの店頭で  
「酒と本があれば、人生何とかやっていける」  
(河谷忠夫 彩流社)  
を見つけたときは飛びつきました。本好きでもかつては人後に落ちなかつたからです。以来、この本は私の机の上に鎮座ましましていました。まさに座右の書です。

ところがある時、酒と本ではないな、酒と女だなど閃いたのです。人生の幸せは後半にありの鍵は酒と女だったのです。そして気がいたら、酒と本の座右の書がいつのまにかわが机上から消えていました。



## 帯津良一 プロフィール

1936年、埼玉県川越市に生まれる。東京大学医学部卒業、医学博士。東大医学部第三外科に入局し、その後都立駒込病院外科医長を経て1982年、川越市に帯津三敬病院を設立。2004年には、池袋に統合医学の拠点、帯津三敬塾クリニックを開設。  
日本ホリスティック医学協会名誉会長。著書に「代替療法はなぜ効くのか?」「健康問答」など。その数は100冊を超える。



灌仏会 温故年中行事  
鮮齊永灌画



灌仏会 東都歳事記  
長谷川雪旦画

江戸砂子年中行事 端午之図(部分)  
揚州周延画  
筆者蔵



端午 菖蒲の節句

陰曆四月八日はお釈迦様の誕生日。お寺の花御堂に安置された誕生仏の像に香水や甘茶を注ぎかける法会が行われ、一般に「花祭り」として親しまれている。積尊誕生の際に天から竜王(帝釈天とも)が舞い降りて甘露を注いだという故事にちなむ。ここでは子どもたちが大活躍をする。めいめい参詣者から受け取った竹筒に甘茶を汲みつぎつぎに手渡すのがまたたいへんな大忙しなのだ。私のふるさとの田舎町では、子どもたちが花で飾った大きな白象を引く稚児行列も行っていたのがなつかしく目に浮かぶ。

灌仏会 花祭り



灌仏会 風俗十二月  
筆者蔵

「上巳」の女の節句に対し、陰曆五月五日の「端午」(「初めの午の日」が本来の意)は男子の節句とされ、菖蒲や蓬を軒にさし、粽や柏餅を食べべて邪気を払う。男の子のすこやかな成長を祈って鯉幟を揚げ甲冑や刀・武者人形などを飾る。また菖蒲湯も心温まる習慣として今も行われる。



亀井戸 東京十二題  
吉田博画  
日本の名画808

(明治東京わらべうた)

菖蒲刀売り 東都歳事記  
長谷川雪旦画



五月の節句は 菖蒲切りがはやる

(新潟わらべうた)

「菖蒲切り」というのは、男の子たちが菖蒲の葉を束ねて作った菖蒲刀で切りあう遊び。昔は「菖蒲打ち」といって菖蒲を棒状に編んでたがいに地面をたたき、音の大きさを競い、また先に切れた方を負けとするなどして遊んだ。さらに「印地打ち」といって集団で盛大に石合戦をしたり、本物の刀に似せた「菖蒲刀」で「いくさごっこ」なども行った。

天神様の細道

ここはどここの細道じゃ 細道じゃ  
天神さんの細道じゃ 細道じゃ  
ちっと通してさんせ くださんせ  
ご用のないもな通されぬ 通されぬ  
天神様へ願かけに 願かけに  
通りゃんせ 通りゃんせ  
往きはよいよい 帰りはこわい

「上巳」は「上巳の祓い」といって人形に身体のけがれを移し海や川に流して災厄を祓う行事で、鳥取などに残る「流し雛」の風習が今もその名残りをとどめている。三月三日は「女の節句」で、女たちが山行きとか磯遊びなどという野外に出て飯を炊き共に食事をする風習が各地に残っている。それもこの日が祓いに出る日で家にはならぬとされていたからと考えられている。次にあげるのは千葉県房総半島の雛送りのうた。

雛さまよ  
来年ごじゃれ  
春の花見にごじゃれ  
赤いべべ着せて 白いべべ着せて  
ポテポテ餅ついてあげろ

(千葉わらべうた)

さくらさくら



春の阿多古山 川瀬巴水画  
東京拾二題 日本の名画808

さくら さくら  
弥生の空は 見渡すかぎり  
梅にはうぐいす ホーホケキヨ

(東京わらべうた)

日本を代表する歌として世界に知られる「さくら」に、梅とウグイスをうたいこんだへくぐり遊びのうた。遊び方は「天神さまの細道」(通りゃんせ)と同じ。類歌に「さくら、さくら、弥生の空をば見渡すかぎり、いざや、いざや、もろともに、地獄極楽閻魔さんの前で、褒められた(叱られた)。(愛知)」など。春の到来を喜ぶのは小鳥たちも同じ。木々につどい、声を限りに春の歌を競い合う。そのにぎやかなこと。



梅に鶯 小原古邨画  
日本の名画808

鳩ととんびと きじとつばめとうぐいすと  
かりがねの鳴き声は かりがねの鳴き声は  
ピーピ ピーピヨロリンケン クークク  
ピーヒョリンケン ケンとケンチャクチャクと  
チャーチクツングルリンと ホーホケキヨ  
イチチンニツチン トツチントンチャク  
ツングリマングリホー ホー

(宮崎わらべうた)

入学式



入学式 少女年中行事双六  
筆者蔵



唱歌 宮川春汀画  
筆者蔵

## 第2回 「中国地方の子守唄」

(岡山県井原市)

今回は、岡山県井原市高屋で伝承された「中国地方の子守唄」をご紹介します。岡山県総社市の総社駅と広島県福山市の神辺駅を結び、田園風景の中をゆったり走る第三セクター井原鉄道井原線。高架式の停車駅「子守唄の里高屋」で下車し、地上に降り立つと赤ん坊をおんぶした女性の銅像(母子像?)が目に入ります。そしてこの像の両側に、子守唄の歌詞を刻んだ石碑と、この唄が昭和の初めに「中国地方の子守唄」の名前で全国的に有名になった経緯を刻んだ石碑が並んでいます。また、駅のホームを支える数本の橋脚には「全国子守唄サミット参加市町村」の名前とそれぞれの子守唄を紹介するプレートが掛けられ、ここが確かに「子守唄の里」だとわかります。

- 一、ねんねこ しやしりませ 寝た子の かわいさ  
起きて泣く子の ねんころろ つら憎さ  
ねんころろん ねんころろん
- 二、ねんねん ころいちゃ 今日ば 二十五日さ  
あすはこの子の ねんころろ 宮参り  
ねんころろん ねんころろん
- 三、宮へ参ったとき 何というて 拜むさ  
一生この子の ねんころろ まめなよに  
ねんころろん ねんころろん

「五木の子守唄」や「江戸の子守唄」などと並ぶ、日本を代表する子守唄の一つですが、口伝えの唄の常として、この唄の起源についてはっきりとしたことは分かっていません。歌詞の冒頭部「ねんねこしやしりませ」は「寝なさいよ」の丁寧な言い回しで、井原市周辺では旧家においてのみ用いられた上品な言葉とされます。広島



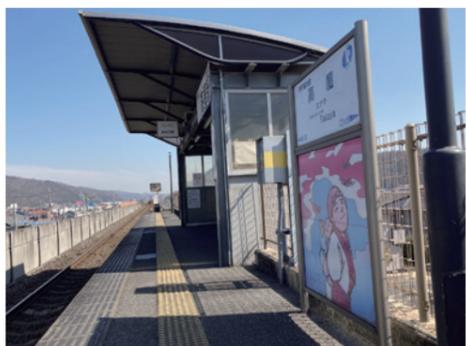
県、大阪府、和歌山県などでもこの言い回しは見られ、その他、「起きて泣く子のつら憎さ」「ねんねんころいちゃ」など、西日本一帯で見られる歌詞がつづられていることから、西日本各地で歌われていたいくつもの子守唄の歌詞が混じり合っただけで出来上がったと考えられます。旋律は、山陽地方の穏やかな気候を反映したと思われる、ゆったりとした四分の二拍子の都節音階です。

元唄成立の時期は、遅くとも一九世紀後半にさかのぼると考えられます。この唄を一九二八(昭和三年)に山田耕筈に歌って聞かせた高屋出身の音楽家・上野耐之の母・今が一八六七(慶応三年)生まれ、また耐之の従弟の長女で、耐之と兄妹のようになり幼少期を過ごし、この唄の初代元唄伝承者として活躍した岡田(旧姓上野)妙子に、この唄をよく歌っていたという祖母・和伊が一八五〇(嘉永三年)生まれだからです。

二人はともに熱心なクリスチャンで、よく一緒に讃美歌を歌っていたようです。彼女たちが通う日本基督教



母子像と石碑



高屋駅ホーム

団高屋教会は一九〇六(明治三九年)の創立で、大正から昭和初めにかけて多くの信者を集めました。またクリスト教徒以外の家庭の子どもたちも日曜学校やクリスマスに参加して、一緒にうたを歌ったりお話を聞いたり、演劇を観たり演じたりして楽しんだそうで、教会は当時この地域の芸術文化の「ステーション」の役割を果たしていたようです。私の手許に、妙子をはじめ三人の地元女性が歌ったこの子守唄の録音テープがあります。妙子のものはとりわけ上品で洗練された旋律となっており、讃美歌が影響しているかもしれません。

この唄が「中国地方の子守唄」として一躍有名になったきっかけは、一九二八(昭和三年)年、上野耐之が音楽家・作曲家を志して上京し、三月に山田耕筈の許を訪ね、この唄を歌って聞かせたことにあります(ちなみに耕筈もクリスチャンです)。耐之の述懐によれば、耕筈は感動して「この唄、僕に聞かれないか」といつて直ちに採譜したといい、翌月にはピアノ伴奏の独唱曲「中国地方の子守唄」として楽譜を出版し、まもなく発売されたレコードがベストセラーになります。耐之にとつて個人的な思い出の詰まった「母の子守唄」は、耕筈の手によって芸術歌曲「中国地方の子守唄」へと装いを変えて全国に知られることとなりました。そして戦後、中学・高校の音楽教科書に採用され全国的な知名度を保ち続けますが、耕筈の編曲版があまりに有名になったために、その元唄があったことや歌曲誕生の経緯については、地元井原でもほとんど忘れ去られていたようです。

一九六四(昭和三九年)年頃、隣町・矢掛町の柴口成浩が調査を開始し、妙子をはじめ何人かの元唄伝承者を発見するとともに、元唄のルーツや井原市とのつながりを雑誌や新聞などに発表しました。一方、井原市は江戸時代以来、山陽街道沿いの宿場町として栄え、また綿織物業が振興し、戦後、紡績業で賑わう時期もありましたが、一九七〇年代には不況に陥り過疎化が深刻になっていました。この頃、柴口の記事を見つけた井原市青年商工会議所のメンバーたちが、町おこしの素材として子守唄の活用を思い立ち、行政や地元財界の支援を得て一九八六(昭和六一)年プロジェクトを本格的に始動させました。

このプロジェクトのリーダーとなったのが妙子の三男・瑋三郎で、プロジェクトの目的として、A.「中国地方の子守唄」の次世代への継承、



高屋教会



上野瑋三郎さん(高屋教会堂内)

B.地域の活性化、C.親子の絆の再構築、以上三つを掲げ、具体的な活動として、①「日本の子守唄フェスティバル」の年次開催、②「全国子守唄サミット」の開催、③「中国地方の子守唄」メロディ・チャイムの一日二回(一七時と二二時)有線放送、④新生児登録時にこの唄を収めたカセットテープ贈呈、⑤地元小中学校や合唱グループによる各種行事での歌唱、⑥元唄伝承者の認定と育成、⑦「子守唄の里高屋駅」の建設と駅周辺の町並み整備などを手がけていきました。これらのうち、②は井原市が全国の自治体に呼びかけて実現したもので、第一回サミットは一九八七(昭和六二年)年に井原市で開催されました。

二〇〇〇年からは、小学生四名に妙子の個人レッスンが月一回、高屋教会で二年間にわたって行われました。妙子にとつて、この唄には祖母の思い出や、子ども時代を過ごした大正時代の高屋の町の賑わいと人びとのぬくもりが詰まっており、その中で育まれた「やさしい気持ち」を、二一世紀を生きる子どもたちに伝えたいというのが妙子の願いでした。このレッスンは彼女の死によって終わりを告げましたが、四人の少女たちはこの子守唄を歌う中で、また何よりも九〇歳を越えた妙子とのふれあいを通して、彼女たちなりに「やさしい気持ち」を育んでいることが、当時レッスンの現場に立ち会った際、私にもはっきりと感じ取れました。

今年(二〇二二年)二月二八日、高屋教会で妙子の次男・上野(旧姓岡田)瑋二郎さんにお会いしました。信者の数も少なくなった中でこの教会堂を守り抜き、耐之や妙子の遺志を継いで、この子守唄に込められた「やさしい気持ち」を次の世代に伝えていこうと励んでおられます。「子守唄の里高屋」を、皆さんもぜひ訪ねてみて下さい。



直島便り ⑬

# 女文楽と瀬戸内芸術祭



南無庵 庵主 山根 光恵  
山口県長門市出身  
浄土真宗本願寺派 布教使

とうとうワクチンを三回も打つはめになってしまった。

もうコロナという言葉も聞き飽きた。人々の、心も、体も、経済も、はかりしれない損失であったと悔やまれてならない。目に見えない敵に歯向かうすべもなく、この三年間を過ごしてきた。

そして、いつまでも冷え込む風の寒さを、さけるようにして、それでも、ちよつとずつ蓄を抱いて葉を伸ばしてきている桜の木の下を通りかかると、なんだか緑の匂いがする。

三年前の秋、文化の日も終わろうとする頃、私の住む直島周辺は、4回目の「瀬戸内国際芸術祭」の成功の余韻に充ちていたような気がする。期間中の総動員数は、百万人を超えたとのことであつた。どこの島も、島人よりも観光客のほうが多く、それも世界中から人が来て、アートはもろろん、景色、島食などを楽しんだ。そのみんなの心と体には、人種や国境の垣根を超えて、本当に平和な時間があつた。

それが、翌年の正月を過ぎたあたりから状況は

直島女文楽



その様子を想像すると、現在の瀬戸内芸術祭の賑わいを彷彿とさせる。その後、時代の変遷とともに島での芸能は廃れてしまったが、戦後になって、島の女性数人がかつて親しまれていた文楽を再興。語りも浄瑠璃もすべて女性が行うという非常に珍しい形で、今日まで引き継がれている。

一変した。目にも見えず、どこから来たのかもわからない、ウイルスという得体のしれないものに、人間世界がこんなにもかき回されることになるうとは、誰が想像したであろうか？

ようやく何とか、人間の英知を絞り出してワクチンや薬などが生まれ、「これで撃退できるのでは」という段階に近づきつつあるけれど、まだまだ道半ばではある。

しかし、時は絶え間なく過ぎ、第五回目の瀬戸内芸術祭の時が来た。

残念ながら、まだまだ世界中の人々が、自由に交わることはできない。それでも、コップの水がこぼれて地中にしみ込み、少しずつ土が潤っていくように、ちよつとだけではあるが、そんな回復の兆しを感じ始めている。

実は直島には、香川県の無形・有形民俗文化財に指定されている、「女文楽」が残っている。江戸時代、直島は天領地であつたので、昔から島内の城山には立派な舞台もあつて、歌舞伎や文楽の公演が許されていたようだ。それを見るために近隣の島々から人々は船を漕いで、芝居見物に来

ていたという。今年は大変なことであつたらうと推察する。が、今年は、女文楽に興味を持つてくれた新しい人たちが、四人も加入してくれたそう。瀬戸内芸術祭2022のオープニングの催しとして、島内の大きな「直島ホール」で上演して、みなさんの目を楽しませてくれるとのこと。本当に楽しみである。

今年にはコロナ禍の影響もあつて、おそらく来場者は日本の人ばかりだろう。でも、来場者の方々には、現代アートとともに、古くから島のみんなが大事に守つてきた貴重な文化財である「女文楽」も観賞していただき、役場で展示している昔の文楽人形の頭や、人形の衣装もぜひ見ていただきたい。

オープニングの演目は「先代萩」、「政岡」の予定だ。

女文楽の三味線や太鼓の音と、瀬戸内海のさざなみにのつて、コロナも遠くに消えてもらおう。



直島ホール 三分一博 設計

## 子ども配食の現場から ④

樋田 敦子

配食を開始したのが2021年2月なので、丸1年が経過した。当初から来続けている人、途中から評判を聞いてやってきた人など、毎回20人前後のシングルマザー、シングルファザーと対峙している。彼らは正規の職を望んでいるが、年齢や条件に阻まれて、希望する職に就きたくても、誰かが分かりやすいステップアップした形にはなりづらい。日本は全労働人口の6割が非正規で、そのうちの7割が女性なので、シングルマザーの状況は推して知るべし、である。

さて通常、皆さんとはLINEでやりとりしている。不安に思つたこと、聞いてほしい愚痴など、24時間オープンにして、たとえ短くても返答することになっている。3月の初旬、「受かりました。ネットの発表で確認しました」と一報が入つた。国家資格、合格率6割の難易度の高い資格試験に合格したという。彼女は未だ離婚

調停中で、2人の息子を抱えながら、正規社員として会社で経理を担当している。ららばいにやってきた時は育休中で、保育所に預けて職場復帰を果たした。

まだ未就学の子ども2人である。やつとの思いで寝かしつけ、寝静まつてから勉強していることは知つていたので、「身体だけは気をつけて無理しないで」と見守つた。もともと向上心があり、頑張り屋さんなので、いつかは合格するとは思っていたが、「あっぱれ」で、こちらも嬉しくなつた。

「資格試験受けましたと言つた時に、皆さんが応援してると言つてくださったことが力になりました」

そう返事がきた。彼女はまた上の資格を目指して、勉強を始めている。このことをやってくるメンバーに伝えると「すごいですね、私も頑張らなきゃと思います」と返事があつた。相乗効果を狙つて、敢えてこのニュースを流したのだが、次々に自分の目標に向かって進む人たちがあつてほしい。

ららばいの配食は、食料提供だけではなく、難しいことではあるが、意欲や向上心を高められるような働きかけをしたいと思つている。

## 追悼 ありがとう小林美智子先生

長い間、「日本子守唄協会」の理事をいただきました小林先生が3月10日にお亡くなりになりました。

長野県伊那保健室長のころより、母乳育児の提唱をなさつてくださり子守唄の復権には、長野県、長崎県、熊本県、福岡県などに子守唄の会を普及するにご尽力くださいました。老岐の島の「子守唄フェスタ」には2000人の観客動員で大成功に導いてくれました。本当にありがとうございました。心から冥福をお祈りいたします。

小児学、長崎シーボルト大学教授、活水女子大学看護学教授。

## 活動報告

### ■スマイキッズフォーラムファミリーコンサート

「うたでつづる日本の四季」がインターネット配信されました

「うたでつづる 日本の四季」が2月25日から3月22日まで、YouTubeで配信になりました。演奏曲目は春、夏、秋、冬のジャンルに分け、「どこかで春が」「北風小僧の寒太郎」「夏は来ぬ」などなじみの深い全27曲を演奏。夏の「ラジオ体操の歌」はユーモラスなフリもついで、子どもたちも大爆笑。親子で楽しめるコンサートになりました。



## 活動予定

### ■ららばい合唱サークル始動!

ららばい協会の入谷支部(今井要二会長)で、ららばい合唱サークルができました。童謡、唱歌、抒情歌を作曲家の山口栄先生の指導で大きな声で歌っていきます。「声を出して歌うと、体と脳の活性化になりますよ」と今井会長。初心者大歓迎です。

日時 4月11日、13時半〜15時半  
会場 入谷区民館4階ホール  
(台東区入谷1-15-6、入谷地区センター内)  
以降、開催は、5月24日、6月28日(いずれも13時半〜)  
問い合わせは、ららばい合唱サークル、今井まで  
090-4072-39954

